

# ミステリ読書案内

2023. 1. 9 発行元

第435号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

## アイリッシュ(ウールリッチ)の代表作

ウィリアム・アイリッシュ、別名コーネル・ウールリッチの代表作。二つの名前があるので、どちらで書こうかと毎回迷う。今、アイリッシュに愛着を持っているのは我々の年代だけになってきているかもしれない。

### サスペンスの名手の作品

大学生になってミステリを本格的に読み始めた私に大きな影響を与えたのはウィリアム・アイリッシュだった。読書初心者ということもあってその一冊一冊が印象に残る思い出の本。

代表作と言えば『幻の女』『暁の死線』は文句なし。第三は『黒衣の花嫁』となる。ただ今回は短編集の方を取り上げた。アイリッシュは是非短編も読んでほしいと思うからだ。短編の『さらばニューヨーク』『妄執の影』『睡眠口座』…など若

い人達にもお薦めしたい。都会の中での孤独感を味わってほしい。アメリカらしいと言うか、日本にはない都会派ミステリとしての雰囲気を読み取ってもらいたいと思う。

長編としては『喪服のランデブー』『黒いカーテン』『黒いアリバイ』『死刑執行人のセレナーデ』などと『ブラックシリーズ』と呼ばれる一連の作品がある。もし、アイリッシュが気に入ったなら本を探してみると良いだろう。

次々と新しい作品が生み出される今日、古典的なミステリとしてアイリッシュを読んでもらいたい。

### NO.3「アイリッシュ短編集1」

アイリッシュの短編は沢山あるのだが、一番まとまっているのは創元推理文庫の『アイリッシュ短編集1～6』だと思う。ハヤカワ・ポケット・ミステリ版の短編集を集めるのは難しいのではないかな。

創元版『1』には8編の短編が収録されている。パルプマガジンなどに載った作品が多い。巻頭の第一話は『晩餐後の物語』。マッケンジーが乗ったエレベーターにはエレベーターボーイを含めて7人が乗っていた。故障でエレベーターが落下し、二人が亡くなった。一年後、亡くなった青年の父親から当時の乗客に晩餐会への招待があった。そこで聞かされるその後の経緯と父親の無念さ。そして食事も終わりに近づいて起こる出来事とは…。

### NO.1「幻の女」

1942年。私の手元にあるのはハヤカワ・ポケットミステリの183番。1975年の改訂1版。下記の『暁の死線』を読んだ後、仙台市内の書店を全部探し回ったが見つからず。それから一年あまり経ってから一番町の高山書店で発見した。ちょうど改訂版発行の時期だったのだ。本書は江戸川乱歩の強い薦めによって日本に紹介された本で、私も大好きな一冊としてベスト表に取り上げている。

「夜は若く、彼もまた若かった。が、夜の空気は甘いのに、彼の気分は苦かった。」(稲葉明雄訳)の冒頭の一文が有名。若い株式ブローカーのスコット・ヘンダーソンは、夫婦喧嘩をしてニューヨークの街に飛び出してしまふ。たまたまバアで出会った女性と一緒に行動することに。南瓜に似たオレンジ色の突飛な帽子を被った女性。レストランで食事をし、カジノへ行き…。夜中にその女性と別れて自宅へ戻ると警察官が待っていた。妻のマーセラがネクタイで絞殺されていたというのだ。ヘンダーソンは逮捕され、アリバイを述べたが認められず、陪審裁判にかけられ、有罪の判決が出てしまふ。「死刑執行までにあと何日」が章の題になっている。アリバイを証明する「幻の女」を求めて活動を開始するのは、親友と若い女性。時間との戦いが…。

### No.2「暁の死線」

1944年。私の手元にあるのは1973年の創元推理文庫5版。200円だ。私が最初に読んだアイリッシュ作品で、今も一番愛着を持っている。本格謎解きミステリでなくとも、こんなにドキドキワクワクさせるものなのだと思感した一冊。ここからアイリッシュ本探しが始まった。

ブリッキー・コールマンという22歳の女性ダンサーが主人公の位置。大都会ニューヨークで暮らす彼女の唯一の友達パラマウント塔の時計台。ということで、各章の最初に時計マークが登場する。短針・長針で時間を示すとともに、彼女を助け励ましてくれる存在。ある晩のダンスホールでの踊りの最後の客としてひとりの若者と出会う。それがクイン・ウィリアムズ。この大都会の中で電気工事店に勤めているのだが、閉店になってもぼんやりどこへ行くともなく出口に立っている。ブリッキー出てくるのを待ち構えていた乱暴者をクインが叩きのめして救ってくれる。その後自宅まで送ってきたクインはブリッキーがアイオワ州グレン・フォールズの出身であることに気付く。同郷だったのだ。話をすると隣の家の子だったことがわかる。聞くと殺人の容疑をかけられているという。潔白を証明するために残されている時間は五時間。二人の必死の調査活動が開始される。刻々迫る時間と、辿れない手掛かり。焦燥感が高まるばかり。夜明けの、暁の刻限までに…。